

Title	日本語方言一型アクセントの研究
Author(s)	山口, 幸洋
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42989
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	山 口 幸 洋
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 14889 号
学位授与年月日	平成11年7月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	日本語方言一型アクセントの研究
論文審査委員	(主査) 教授 真田 信治 (副査) 教授 前田 富祺 教授 土岐 哲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語方言における、いわゆる一型アクセントの実態とその成立を論じたものである。論文は12の章で構成されている。そして付録として、各地の談話資料テキストが添えられている。

第1章では、日本の一型アクセント研究に関するこれまでの学界の経緯をまとめ、第2章では、日本語におけるアクセントの観念、観察のあり方を検討する。従来のような語単位でのアクセント研究に加え、文単位での観察の重要性を指摘する。そして、その文単位のアクセントを「文アクセント」と名付け、その研究の方法について説く。

第3章では、従来の単語中心の「調査表」の「読み」の調査では、それなりの特徴が観察されるとしても、それは単なる類型化にとどまるのみで、その方言の実相は何も説明できないことを指摘する。そして、第4・5章では、一型アクセント方言において、調査表による単語アクセントの実現がいかに不安定で不確定なものであるかを、静岡県大井川上流の川根村、静岡市井川、及び群馬県館林市、栃木県佐野市・足利市の方言を事例として記述する。

第6章では、調査表による上のような不安定な実現に対して、日常の会話におけるアクセント（本論文での文アクセント）では著しい特徴が観察されることを述べる。そしてそれが全国の一型アクセント方言にほぼ共通する特徴であることを論じる。また、この一型アクセント方言の特徴については、民間に古くからその認識が存在したことを明らかにする。「尻上がり」「一本調子」などといった表現はその一部である。

第7章では、一型アクセント方言の文アクセントの特徴について、福島県須賀川市、茨城県石岡市、静岡県の大井川上流の本川根町、静岡市井川、福井県嶺北の福井市、武生市、織田町、愛媛県喜多郡長浜町、内子町、宮崎県延岡市、佐土原町、日南市、都城市、小林市での収録談話資料に基づいて考察する。第8章では、東京都八丈島方言について検討する。これらすべての一型アクセントに共通するのはいわゆる一本調子であるが、それには、全文が区切りなく続く「一体連続平板調」と、ところどころ文節で区切りながら平板調を繰り返す「更新連続平板調」があることを指摘する。そして、このいずれの場合もすべての単語が平板的無下降で実現することを述べる。

第9章では、このような一型アクセント方言においても、文の部分の単語単位に一見標準語的な下降が観察されることがあり、各事例を検討する。分析の結果、この下降は「擬似語アクセント」とも称すべき、標準語習得途上にお

けるアクセントであることを確認する。

第10章では、各地一型アクセント方言における、それぞれの個別の特徴を取り上げる。従来から有名な都城「尾高一型」アクセントは、「末尾卓立」という一種の個別事情に過ぎず、同種のものは八丈島や井川、さらに福井にもあるものであるとする。なお、特に注意されるものとして、ポーズを置かずに続ける「無ポーズ一気調」、ポーズを置かないまま区切りの役割を果たす「文節末下降」などがあるとする。

第11章では、日本語研究、わけても方言研究における談話資料分析の重要性を述べ、従来のような調査だけでは、地域の生活におけるナマの会話の実態は把握できないことを具体的に指摘する。そして、第12章では、一型アクセントの成立に関する従来の通説に代わる新しい見解を提出する。それは「日本語方言における一型アクセントは日本列島における、もう一つの原始日本語アクセントである可能性がある」とする見通しである。

論文審査の結果の要旨

日本語の一型アクセントについては、型区別のある東京式アクセント、あるいは京阪式アクセントが変化・崩壊して成立したという見方が斯界の通説となっている。「崩壊アクセント」や「曖昧アクセント」といった用語もそのような観点からのものである。

一般にアクセント調査は、その方言にアクセントの弁別が存在することを前提として、それなりの結果が得られるのに対し、一型アクセントの場合はそうではない。発音自体が曖昧（上昇下降の判別すら困難）ということがあり、単語の「読み」の著しい個人差に加えて、同一個人でも揺れる（「読み」自体が安定しない）ことが普通である。そして調査に際し、弁別がときに存在するような気配も見せるので、その確認に戸惑う。多くの研究者がその弁別を追求しようとして苦労したのも無理のないことであった。しかし、その調査の結果は、「存在しないものを存在せしめる」ことになった疑いがある。このような確認困難な地域、あるいは個人のアクセントについては、それが「曖昧アクセント」と称され、「調査を繰り返すことによって、失われたアクセントが現れる」とされたり、「アクセント体系が崩壊、あるいは一型化する直前の状況」と捉えられたりした。しかしながら、その地域のアクセントがかつて有弁別体系であったということの証拠で確かなのは、ただ、文献で知られる中央日本語のアクセントが一型ではなかったというだけである。その地域のアクセントが以前から無弁別体系であった可能性が検討されることはほとんどなかった。そもそも、「型知覚がない、曖昧だ」という表現は、「標準語にあるものが方言にない、方言ゆえにない」と優劣評価をしているわけで、「一型化」という用語も「一型は変化した姿である」ということが前提になっている。

申請者は、このような見地から、各地の具体的音相を緻密に観察し、状況を総合した上で「一型アクセントは、中央語の変化の結果として成立したのではなく、日本語アクセントの原初的なものの一つではないか」とする、斯界への反論的見解を提出したのである。確かに、通説での「(弁別)型がないのはそれが消失した、従って新しい発生」というのは、典型的な周圏分布を描く日本語アクセント分布に照らして不審である。日本列島の周縁部、あるいは辺境部に共通して存在する一型アクセントにも方言周圏論的解釈を適用し、相対的には古型であるとする解釈も理論的には十分可能性があると考えられるのである。

また申請者は、周縁部での一型アクセントと中央部の京阪式アクセント、そしてその中間に位置する東京式アクセントなどの織り成す日本列島のアクセント分布についても、(弁別)型を持たなかった一型アクセントが、強力な中央語アクセントの摂取のもとで、型を獲得してきた過程の図式だと見做し、型の獲得が困難のままに至っている様相も、中途半端に獲得している様相も、現代の一型アクセント地域出身者や留学生などの発音に現実に観察される通りである、とする。納得のいく論である。

一型アクセントは、世界的にはアイヌ語、朝鮮語、満州語、モンゴル語などの北方諸語、インドネシア語、ミクロネシア語などの南方諸語、そして、トルコ語、フランス語などにも存在するもので、日本語の場合だけを「本来確として存在していたアクセントの型区別が失われた」とするのはむしろ不自然であろう。申請者の一型アクセント成立

に関する見解は、あくまで状況証拠に基づいたものではあるが、斯界に大きなインパクトを与える内容を持っている。この方面での研究は本論文を契機として見直しが迫られるであろう。

以上のように、本論文は、日本語のアクセント研究に新鮮な刺激を与えるものであり、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容を有するものと認定する。